

**正誤表**

以下の通り誤りがありました。お詫びして訂正致します。

頁数	該当箇所	誤	正
141 頁	彙報 史学科 上段 2 行目	日本古代における左右近衛府の変化と 特質—近衛対象と中心として—	日本古代における左右近衛府の変化 と特質—近衛大将を中心として—
裏表紙	山田邦明氏書 評英題	Reconsideration of the Early Medieval Society: Review of TANAKA <u>Daiki</u> , <i>The Medieval Times of the Nitta Family</i> , and of TAKAHASHI Hideki, <i>The Medieval Times of the Miura Family</i>	Reconsideration of the Early Medieval Society: Review of TANAKA <u>Hiroki</u> , <i>The Medieval Times of the Nitta Family</i> , and of TAKAHASHI Hideki, <i>The Medieval Times of the Miura Family</i>

## 中世前期の社会を捉えなおす

—— 田中大喜『新田一族の中世』、高橋秀樹『三浦一族の中世』を読んで ——

山田邦明

高橋秀樹氏の著書『三浦一族の中世』（二〇一五年五月刊行）と、

田中大喜氏の著書『新田一族の中世——「武家の棟梁」への道——』

（同年九月刊行）は、いずれも吉川弘文館の「歴史文化ライブラリー」の一冊として編集されたものである。よく似たタイトルなので、両方とも個別武士団の研究のように見えるが、目指しているベクトルはかなり違っていて、まとめて論評するのは難しい。しかし、ともに中世前期の社会にかかわるもので、新鮮な問題提起に富んでいるので、二つの著書をあわせて内容紹介を試みてみたい。刊行の順序とは前後するが、行論の都合上、まずは田中氏の著書の紹介から始めたい。

田中氏の『新田一族の中世』は、上野国の新田荘を本拠とする御家人で、新田義貞の活躍でも知られる新田氏とその一門の動向について、時代を追って具体的に明らかにした力作である。論点の紹介には全体像の提示が必要なので、やや煩雑になるが、最初に全体の

構成を示したい。

『太平記』のなかの新田氏—プロローグ

新田氏の成立（成立前史／新田氏成立の政治史）

雌伏の時代（鎌倉幕府の成立と新田氏／新田本宗家と足利氏／

里見氏・山名氏・世良田氏と足利氏）

地域権力としての姿（新田氏の軍事テリトリーをたどる／新田

氏の求心力を探る）

「武家の棟梁—新田氏の誕生（新田氏の自立／越前に描いた夢

／義興と義宗の挑戦）

『太平記』の刻印—エピローグ

この構成を見れば、本書の主たる論点がどこにあるか、おのずと理解できよう。新田氏といえはまず想起されるのが新田義貞の活躍だが、足利尊氏のライバルとして戦い敗れた悲劇の武将というイメージを作りあげたのは、広く人々に親しまれた『太平記』である。田中氏はこうした義貞と新田氏のイメージが、同時代における現実

と同じかどうか疑問を持ち、その検証を行ったのである。『太平記』で始まり（プロローグ）『太平記』で締めくくられる（エピローグ）という本書の構成は、いちばんの軸となる論点がここにあることをよく示している。

この論点に関わって最も重要なのは「雌伏の時代」の章である。義国流清和源氏の中で、義国の子の義重は中心的立場にいたが、源頼朝とは競合関係にあったため優遇されず、子息の山名義範や孫の里見義成のほうが頼朝の信任を得て活躍した。新田の本宗家を継いだ新田政義は、幼くして祖父と父を失ったこともあり、同じ義国流清和源氏の足利義氏の庇護を受けるようになる。嘉禎三年（一二三三）四月、將軍頼経が足利義氏邸に立ち寄ったとき、新田政義が足利一門とともに「引馬役」をつとめている（『吾妻鏡』）のが最初の証左であるが、その後政氏―基氏―朝氏―義貞と続く新田氏の当主は、代々足利本宗家の家督から偏諱を下賜される存在で、足利本宗家に従属する形で足利一門に包摂されるに至ったというのである。また一時勢力を誇った山名・里見や世良田氏も、当主の失脚などを契機として結局は足利氏に従う存在となったとされる。

新田義貞の挙兵については「武家の棟梁」新田氏の誕生」の章の冒頭でふれられているが、義貞の挙兵は足利高氏（尊氏）の討幕計画に基づいて行ったもので、当時の新田は足利と対等に争える関係にはなかったとする。『神皇正統記』の「東にも上野国に源義貞と云者あり、高氏が一族なり」、『増鏡』の「尊氏の末の一族新田小四郎義貞といふ物」という記述は、決して誇張ではなく、当時の現実をよく表現しているといえる。新田が足利に従うという鎌倉時代

以来の関係は継続していたが、尊氏と弟の直義が後醍醐天皇に反旗を翻す時に新田義貞を直接の敵とみなし、「新田右衛門佐義貞を誅伐せらるべきなり」という文言を盛り込んだ文書を発給したことが新田の立場を押し上げ、義貞は尊氏と対抗しうる「武家の棟梁」と認識されるに至った。田中氏はこのように論点をまとめている。

新田義貞を足利に対抗しうる「武家の棟梁」として描く『太平記』の記述が生じた背景にはこうした事情があり、このような新田の立場を古くから継承されたものととらえることはできないというのが田中氏の主張で、鎌倉期の史料をもとに新田一門が足利氏に包摂されていくさまを具体的に跡づけたことがなよりの功績といえる。新田本宗家の足利一門化を論じたのち、「新田本宗家の足利一門化は、幕府政治を舞台とした、新田本宗家と足利本宗家との政治的応答関係の所産（帰結）と捉え、動態的に把握することが肝要と考える。」と述べられているが、歴史的展開のそれぞれの時点における人間関係を丁寧な跡づけていく手法こそ、本書のもつ大きな魅力ということができよう。

鎌倉期における新田一門の実像を追いながら、新田氏が「武家の棟梁」として認識されるに至る事情を捉えるというのが本書の中心的な筋になっているが、この論点から離れたところでも注目すべき事柄が多く述べられている。「新田氏の成立」の章では、義国流清和源氏が畠山氏や児玉党など周辺の武士たちとネットワークを築いていたこと、藤姓足利氏らとともに新田荘の開発にあたったが、やがて藤姓足利氏との間に摩擦が生じ、これが源義重が八幡荘から新田荘に本拠を移す契機になったことを指摘される。また「地域権力

としての姿」の章では、新田一門の本貫地となった里見と山名が上野国から国外に通じる主要交通路上に位置していること、新田氏が北武蔵の村岡や大蔵にも進出したこと、長楽寺のある世良田宿が新田氏だけでなく上野東部や武蔵北部の武士たちが集う「共生の場」になっていたことなどを指摘される。新田氏というと新田荘の領主というイメージがあるが、その活動は広範囲にわたり、また上野や武蔵北部の武士たちも新田氏とかわりをもちながら広域な活動を展開していたことが随所で示されているのである。鎌倉期の地頭御家人の活動の広がりを知ったことも、本書の特長の一つということができよう。

高橋氏の『三浦一族の中世』は、相模の三浦を本貫地とする御家人で、鎌倉幕府の重鎮として活躍した三浦氏とその一門の歩みをまとめたものだが、一つの一族の歴史に止まらず、中世前期の日本の社会の仕組みや歴史の流れを全体的に述べるといふ大きなテーマを設定し、多くの紙幅をこれに割いている。冒頭の箇所で「三浦一族研究の最前線を紹介するのが本書の役割の一つ」と述べながら、「もうひとつの課題は、日本の中世前期の政治や社会の流れを通史的に追い、その流れのなかに三浦一族という個別の武士団や三浦氏出身の人物の動向、彼らが領した地域を積極的に位置づけることである。」と明言されており、三浦一族の歴史を語ることで、中世前期社会の全体像を述べることという二つのテーマが並立しながら叙述が進められていくのである。とりあえず本書の構成を示すと以下のようになる。

三浦一族の中世、日本の中世―プロローグ

三浦氏の神話から歴史へ 為継・義継・義明の時代（院政のはじまりと武士の台頭／荘園公領制と国衙／保元の乱と平治の乱／院政期の文化）

三浦一族の発展と鎌倉幕府 義明・義澄・義盛の時代（平氏政権／内乱のはじまり／鎌倉幕府の成立過程／東大寺再建事業のシンボリズム）

三浦一族と朝幕関係 義村・泰村の時代（北条氏の台頭と承久の乱／承久の乱後の情勢と朝廷政治／幕府政治の展開／鎌倉時代の文化）

全国展開する三浦一族と社会変動 佐原系三浦氏と三浦和田氏の時代（御家人制と惣領制／武士の支配と荘園／鎌倉後期の政治と外交／鎌倉倒幕から南北朝の内乱へ）

伝説化される三浦一族―エピソード

この構成を一覧すると、章のタイトルは三浦一族を主題とし、その中の節は政治の動きや社会・文化にかかわるテーマとなっていて、前記した二つの課題にともなえながら論述が展開されていることがよくわかる。ここではまず全体的な政治や社会にかかわる叙述について紹介し、そのあと三浦一族のことにふれたいと思う。

前記したように、日本の中世前期の政治や社会の流れを通史的に追うことが本書の一つの課題だと、高橋氏は冒頭で明示されているが、これに加えて「朝廷の動きと幕府の動きをバランスよく捉えたいと思っている」と述べ、「貴族社会・武家社会共通の物差しを用いること」もバランスのとれた論述を行う一つの手段であるとされ

ている。朝廷と幕府を別々にとらえるのではなく、両者を含みこんだ政治や社会の動きを、バランスよく捉えていくことが本書の大きな課題であり、こうした視点による興味深い指摘も随所にみられる。

中世前期の政治史を論じるときによく問題にされる鎌倉幕府の成立の画期について、建久元年（一一九〇）の頼朝の上洛が国制史上最も重要な画期であると、高橋氏は主張される。従来はこのとき頼朝が右近衛大将に任じられたことが注目されてきたが、むしろ頼朝が後白河法皇や藤原兼実と直接会谈し、平時における頼朝の役割が定められたことが重要であると指摘される。そして五年後に行われた東大寺再建供養に着目し、これが朝廷と幕府の共同事業であり、それに寺社勢力の力を合わせた形で具現化・象徴化したのが供養法会だったとされ、「建久六年の東大寺再建供養は、鎌倉時代前期の政治・経済・宗教・文化・外交の縮図であったと言っても過言ではなからう」と結論づける。朝廷・幕府や寺社勢力が対立関係にあるのではなく、おのおのの役割を果たしながら政治を担っているという見方が貫かれているといえよう。

承久三年（一二二二）の後鳥羽上皇の行動についても、幕府を解体させることを企図したわけではなく、北条義時の首のすげ替えが目的だったと推測される。鎌倉にいた三寅の父にあたる藤原道家が上皇に協力していることを根拠として、三寅を廃することになる倒幕を企てたとは思えないのである。また乱後に京都に置かれた六波羅探題についても、よくいわれるような「朝廷の監視」の役目があったことには疑問を呈している。朝廷と幕府は基本的に対立する存在ではないという視点がここからもうかがえる。

朝廷の政治にかかわる記述も多いが、ことに興味を引くのは藤原道家の評価である。自身や子息・婿が摂政・関白を歴任し、子息の一人（頼経）は鎌倉殿で、娘は天皇の后となって皇子を生み、宗教界においても子息が天台座主・園城寺長史・興福寺別当・東大寺別当・仁和寺御室の地位に就いていて、「中世国家を構成する権門のほほすべてを子息や婿で押さえて」おり、このようなことは過去に例がないと指摘される。この時代の朝廷については一般には知られていないことが多いが、朝廷の内部に限定されていたとはいえ、道家の権力のひろがりやを明示されたことは重要だと思う。

このような政治過程にかかわる論点を提示しながら、中世前期社会における身分制や人間関係の全体的把握も試みられている。まず「侍」という身分に注目し、これは諸司の三等官（丞・允・尉）を経て、叙爵しても極位は五位に留まる家格の者を指し、多くの御家人はこの地位にあったわけで、「侍」という言葉は武士的な性格を持つか持たないかとは関係のないものであると明確に指摘される。また、当時の社会における主従関係にも言及し、貴族社会では名簿提出といった臣従儀礼があるが、頼朝と御家人との間でこのような臣従儀礼がなされた形跡はなく、貴族社会よりも主従関係は緩やかであったとされる。「侍」といえば武士を連想し、また将軍と御家人とは強固な主従関係で結ばれているというイメージがあるが、こうした観念を打ち破る貴重な指摘といえよう。

続いて三浦一族にかかわる叙述の紹介に移りたい。三浦義明・三浦義澄・和田義盛・三浦義村といった一門の活躍はよく知られていて、研究も進められているが、高橋氏は現在までに発見された史料

の分析と、政治や社会の状況にかかわる知識に基づく考察によって、蓋然性の高い（違和感の少ない）歴史像を提示しようと試みられている。三浦氏の出自については、源氏や平氏・藤原氏のような貴姓ではなく、三浦半島在住の卑姓の地方豪族であったと考えるほうがいいだろうととらえた上で、結論的には三浦氏の出自は不明であるといわれる。また源義平（義朝の子）の母が三浦義明の娘であるという所伝にも疑問を呈し、和田義盛は「侍所別当」に任じられたというが、当時の史料には「侍別当」とみえる指摘される。源実朝の暗殺に三浦義村が「黒幕」として関わったという説を高橋氏は批判し、こうした想定が生まれる背景には北条義時と三浦義村が対立し利害関係を異にしているという認識があるが、当時の義時と義村は決して対立する存在ではなく、ともに連帯しながら幕府政治を運営していたとみるべきだと主張される。奇抜な想定を排し、この時代の政治や社会の実情を冷静に把握しながら、三浦一族の動きをとらえるという方法が貫かれているのである。

前述したように朝廷と幕府の関係の捉えなおしが本書の一つの課題であるが、三浦氏にかかわる論述においても、京都の朝廷や貴族との関わりを重視する視点が強く見られる。「三浦一族と朝幕関係」の章では三浦義村・泰村らと朝廷や貴族の関係を詳細にあとづけていて、本書の中でもひときわ生彩を放っている。承久の乱の後、守貞親王の子の茂仁王が踐祚する（後堀河天皇）が、このとき交渉にあたったのが三浦義村だった。この件については「賀茂旧記」という記録にみえるが、その内容を分析しながら、守貞室の藤原陳子とその子茂仁が住む北白河殿に義村が赴いて、幼い宮に出席を要請

し、「直接拝み倒すようにして」踐祚の了承を取り付けたのではないかと、具体的な状況を述べられている。そして義村がこのような重要な役割を担えた理由として、すでに駿河守という受領に任じられていて、「侍」の上の「諸大夫」の身分になっていたこと、「貴族たちが重視していた礼を弁えた人物で、十分な政治的判断力を有していたこと」があげられるとされる。

三浦義村は幕府関係者の中で重要な地位にいて、朝廷からも認められていたというわけだが、それだけでなく、義村やその子の泰村が、京都の貴族との間に個別に関係を結んでいたことも指摘されている。泰村の妻は源通親の娘で、義村の娘は九条家家人の藤原親季に嫁いでおり、また義村の子息には天台宗門跡の青蓮院に入った者もいた。鎌倉幕府の重鎮だっただけでなく、京都の貴族社会ともさまざまなつながりを持つという三浦氏の特質を浮かび上がらせたことが、本書の一つの特長ということができよう。

田中氏の著書は新田氏とその一族の歴史の実態に深く迫ったもので、高橋氏の著書は三浦一族の歴史を跡づけるとともに、中世前期の政治や社会の内実を全体的に論じた内容となっている。このように両書の方向性は異なっているように見えるが、後世に作られたイメージにこだわらず、対象とする時代に書かれた史料を分析しながら、当時の政治や社会の実像を解明しようと試み、具体的な像を提示されているところは共通しているといえる。田中氏は鎌倉時代のそれぞれの時期における新田本宗家と一門の動きを追いながら、さまざまな契機を経て足利本宗家に包摂されていくさまを明らかに



された。鎌倉期の「御家人」というと、勢力規模の大小はあってもそれぞれ独立した存在として位置づけられているというイメージがあるが、当主の死去や没落といった時々々の事情によって、勢力のある御家人の庇護下に置かれてしまう御家人もいたことが、具体的に解明されたのである。高橋氏は鎌倉期の政治動向と三浦氏を含むさまざまな人々の行動を追いながら、以前から存在した貴族社会の秩序の中で武家の動きをとらえるべきであると論じられた。ともすれば幕府中心になりがちな従来の研究を再検討し、朝廷や貴族社会のもつ意味を前面に押し出しながら、武家も含めた時代像を描き出した試みとして評価できよう。両書ともに中世前期の政治や社会をあらためて捉えなおした貴重な業績といえるだろう。

私は中世後期を主な研究対象としていて、中世前期のことについては不案内のところが多いので、的外れな紹介だったかもしれないが、中世前期の政治や社会にかかわる一般的な知識やイメージを、あらためて捉えなおした両書から、多くを学ばせていただいた。ただ単なる紹介だけでは責を果したとはいえないので、最後に若干の論点を提示してみた。

鎌倉期に新田一族は足利氏に包摂された存在だったが、足利尊氏が後醍醐天皇との戦いを始めるにあたって、新田義貞を敵として明示したことによって新田が「武家の棟梁」と認識されたという田中氏のストーリーは、わかりやすいものだが、こうした契機によって新田の立場が大きく変わるものなのかどうか疑問もある。たしかに鎌倉期の新田一族は足利氏に従う存在だったかもしれないが、そうした中で足利氏に対する自立意識のようなものも生まれていたのだ

はないか。すでにかかなりの自負心を持っていたからこそ、足利に對抗しうる存在として自らを再認識したのではないか。新田が足利をどう見ていたかということについては、いま一層の分析が必要のようには思えるのである。新田一族の中には足利に従った者もいたが、それでもかなりの一門が本宗家の当主である義貞に従って活動しており、このような本宗家の地位をどう評価するかもだいたいな論点となろう。

鎌倉期の政治や社会をとらえるときに、朝廷と幕府を対立的にみるのではなく、以前から存在していた貴族社会の秩序の中で、幕府やその関係者の動きを把握するべきだという高橋氏の提言は賛同できし、おそらく当時の人々の一般的認識はここで示されたようなものだったと思われる。ただ現実の社会で生起する諸問題を見てみると、貴族の所領支配は困難さを増し、地頭は独自の動きを強め、天皇家の相続問題に幕府が関与するといった現象は否定できず、こうした現実社会の動きのなかで「秩序」の問題をどう位置づけるかが問われるのではないかという気もする。藤原道家がもろもろの権門に子弟を送り込み、強大な権力を持ったという指摘は興味深い。この段階における朝廷や摂関家の勢力は前代よりもおそらく縮小しているので、そうした時代動向の中で道家の権力も位置づけることが必要なのではないかと思う。

いささか蕪雑な感想を述べてしまった。前記したように専門外分野なので、的外れなところもあるかと思うが、御寛恕を乞いたい。